

要 旨

博士論文要旨

日本近代文学に見る〈教員〉像と教育言説の研究

広島大学大学院文学研究科

出木 良輔

要 旨

本研究は、近代日本の文学やメディアの分析を通じて、学校教員という記号の形成と流通のプロセスを問うものである。従来の教員史研究は、制度史料を分析対象とするが故に教員を取り巻く文化やメディアの諸問題を看過してきた。日本文学研究においても、文学が社会的に構築する〈教員〉像の問題性や、近代文学読者としての学校教員の歴史性は殆ど問いに付されてこなかった。本研究ではこうした問題について検討することで、近代学校教員と文学の関係性に新たな視角をもたらすことを目指した。

本論文は第Ⅰ部「近代日本の教育雑誌と教育言説の欲望」ならびに第Ⅱ部「日本近代文学に見る〈教員〉像と〈教員の物語〉」の2部から構成される。概して言えば、第Ⅰ部では教育雑誌というメディアについて、第Ⅱ部では日本近代文学における教員表象についての議論を展開している。

以下、具体的に概要を示してゆく。第Ⅰ部では主に同文館発行の教育雑誌『教育学术界』に焦点を当て、そこに掲載された教育言説や文学作品が内包するイデオロギー性を検討している。

『教育学术界』掲載の文学作品を扱う先行研究は存在しない。そのため、**第一章「教育雑誌『教育学术界』の文学と青年教員」**ではまず、『教育学术界』に掲載された文芸作品や文芸関連記事を収集し、整理と分析を行なった。また、同誌が誌面の改良を行ない、文学的傾向を打ち出してゆく明治35年前後に焦点を当て、同誌の内外における「教育的文学」ないし「教育小説」をめぐる議論を概観した。その上で、『教育学术界』（明治35年1月）に「新年付録」として掲載された「教育小説」である中内蝶二「寒梅」を取り上げ、『教育学术界』において文学テキストがどのような機能を担っていたのかを考えた。「寒梅」もやはり、〈理想の教員像〉を描く小説である。ここでは『教育学术界』に掲載されていた教師論が描く〈理想の教員像〉とリンクする教員像を「寒梅」が表象していたことを明らかにした。要するに『教育学术界』は、物語化した教育言説として、文学テキストを利用していたといえるだろう。

第二章「〈田舎教師〉の欲望をさえぎる」では、明治40年代の『教育学术界』に掲載された「教育小説」群を取り上げ、同じ頃ベストセラーとなり、きわめて多くの教員読者を獲得した「教育小説」である小泉又一『教育小説棄石』（同文館、明治40年5月）の表現と対比しつつ分析した。『教育小説棄石』が描く〈理想の教員像〉とは、一言で言えば、「地方の小学校教員の職に一生を捧げ、階層上昇を望まない存在」である。『教育学术界』は『教育小説棄石』の書評を掲載していた他、この小説が描く〈理想の教員像〉を反復して表象するような「教育小説」を明治40年代に複数掲載していた。のみならず、この時期の『教育学术界』掲載小説からは、地方から上京した画家や小説家が東京で夢に破れ挫折・破滅してゆくというプロットを持つ物語を見出すことも出来る。これらの小説が、文学に燃える当時の青年教員たちの欲望を「さえぎる」機能を担っていた可能性をここで指摘した。

要 旨

続いて分析の射程に入れたのは、教員社会のジェンダー編成をめぐる問題系である。**第三章「教育雑誌と〈女教員〉の大正」**では、大正期の「教育小説」に描かれる〈理想の教員像〉のジェンダー間での振幅を問題化した。大正初年は、女子教育の成熟と女性教員の増加を背景として「女教員問題」がメディアを賑わし、多くの教育家によって「理想の女教員」像が模索されていた時期でもあった。この時期の「教育小説」にも女性教員がしばしば表象されることとなるが、「教育小説」において女性教員は、それまで以上に露骨に地方での教職を肯定的に語る存在として描き出されていたと言える。

一方でこの時期には、教職を否定し、辞職して上京してゆく男性教員の姿が描かれるなど、表象される教員のジェンダー間での差異が見え始める。この章では、過剰なまでに地方を美化する女性教員の語りを、女性教員を地方へと囲い込む表現として捉え、女性教員の増加に伴う下位化・抑圧の運動に「教育小説」が一役買っていたものとして位置づけた。こうした分析によって浮かび上がったのは、「教育小説」が、教員社会のジェンダー秩序の維持や強化にも深く関与していた可能性であったと言えよう。

続く第四章と第五章は共に、第I部における補論のような意味を持っている。**第四章「投稿青年と教育雑誌の時代」**では、『教育学术界』や『小学校』（共に同文館）の常連投稿者であった井川（恒藤）恭をピックアップし、彼が井川天籟の名で発表した小説「海の花」を取り上げた。後に法哲学者として名を成す井川（恒藤）恭だが、彼は明治後半から大正期にかけて創作活動を行い、様々なメディアに作品投稿を行っていたことでも知られている。彼の処女小説とされる「海の花」は『都新聞』の懸賞小説で一等を獲得した作品であり、明治41年7月に同紙で集中連載された。井川の故郷でもある島根県を主な舞台とする物語を描いているが、言ってしまうと明治後期に流行した通俗的な新聞小説のパターンをわかりやすく反復するテキストで、評価もそれほど高くない。

ただし注目されるのは、この作品においても、視点人物として教員が描き出されること。そして、彼によって「教育の害毒」なるものをめぐる語りがなされることである。教員による「教育」批判、というアイロニカルな表現を見せる「海の花」だが、処女作である「海の花」において、既にこのような「教育」批判を展開していた井川が、後に教育雑誌に教員の物語を投稿していたことは興味深いと言える。実際、『教育学术界』などに掲載された井川の小説からは、「教育小説」のパターンから逸脱するような表現も見られる。このような事実からは、〈理想〉の教育像や教員像が、『教育学术界』の投稿者に必ずしも共有されていなかった可能性も浮かび上がった。井川恭は、言ってみれば『教育学术界』というメディアのイデオロギーに亀裂を入れうる異端分子と形容することが出来るだろう。

第五章「女性文芸誌と〈女教員〉たちの欲望」では、女性文芸誌『女子文壇』『青鞥』に掲載された小説における教員表象や教職をめぐる語りについて検討した。これらの雑誌の読者・書

要 旨

き手には〈女教員〉やその経験者が一定数存在していた。『女子文壇』がしばしば〈女教員〉からの投書や投稿小説を掲載していたことや『青鞥』参加者に生田花世、尾島菊子など〈女教員〉経験者が多数存在していたことはよく知られている。この章では、彼女たちの小説や教員体験記を教育言説と比較照合することで、教育雑誌における様々な表現を相対化すると共に、『教育学術界』の文学が内包するイデオロギーを浮き彫りにすることを試みた。とりわけ生田花世のテキストからは、第三章で見たような大正期の教育言説を意識し、それを茶化するような表現も見出すことが出来た。このように教育雑誌というメディアの外部の視点を導入し、様々な書き手による多様な表現性を捉えてゆくことで、教育言説や「教育小説」の表現の画一性やその背後にあるイデオロギー性が浮き彫りになったと言えるだろう。

第Ⅱ部では、「坊っちゃん」や「田舎教師」といった著名な〈教員の物語〉を分析対象として取り上げ、そこに表象される〈教員〉像の分析を行うことで、作品読解の更新や思想的な位置の問い直しを図った。加えて、日本近代文学の作品や作家像を、教員という読者がどのように受容していたのか調査・検討した。

第六章「『坊っちゃん』は真に大教育書なり」では、夏目漱石「坊っちゃん」が明治40年代の教員たちにどのように読まれたのかを考えた。〈教員の物語〉を描く日本近代文学の代表とも言える「坊っちゃん」が、当の学校教員たちにどのように読まれ得たのかについてはこれまで殆ど考察されてこなかった。この章では教育雑誌に掲載された記事から「坊っちゃん」に関する教員たちの発言を拾い上げ概観することで、教員たちによって「坊っちゃん」が「大教育書」として評価されてゆく様相を捉えた。

また、そのような評価の根拠を探るためにも、同時代の教育言説を視座としたテキスト分析も併せて行なった。それにより、「坊っちゃん」というテキストから、いわゆる「聖職教師論」や、明治後期の教員の待遇問題に対する批評性が見出されることを明らかにし、また、そのような表現性が、実際に待遇改善を求める動きをみせていた同時代の教員たちと共鳴した可能性を指摘した。

ところで、「坊っちゃん」が描き出すのは、四国という地方の学校で奉職する、いわば〈田舎教師〉たちの姿であったと言える。明治末期から大正期には、学歴の世界から脱落した哀れな存在としての〈田舎教師〉表象が様々なテキストにあらわれることとなるが、第七章「『田舎教師』の『理想』の行方」では、〈田舎教師〉を表象するテキストの代表例とも言える田山花袋「田舎教師」を取り上げ、林清三という〈教員〉像について考察した。

「田舎教師」には、第Ⅰ部で見た教育言説が描き出すような〈理想の教員像〉と、社会的上昇への欲望との間で揺れ動く、林清三という教員の姿が描かれている。特に注目したのは、このテキストにおいて教職を侮蔑するような清三の内面が語られていること、そしてそれが読者にのみ提示される点である。このテキストは、このような清三の本心をあずかり知らない他者

要 旨

が、清三の死後「石碑」を建立し、一方的に〈理想の教員像〉の如く彼を頌徳してゆく様を描いている。つまり、教職を蔑視していたはずの清三が、他者から一方的に〈理想の教員像〉として見られてゆく様を描くわけである。こうしたことを踏まえれば、「田舎教師」は、〈理想の教員像〉を語る言説の虚構性・理想性を脱色してしまうテキストであったとも言えるだろう。

第八章「「変人」あるいは〈田舎教師〉の「幸福」でも、同じく〈田舎教師〉の物語である正宗白鳥「入江のほとり」を取り上げ、そこに描かれた「独学」行為の問題性について検討した。このテキストが描き出すのは、教職のかたわら、自宅で英語の「独学」に没頭する小学校教員・辰男と、彼を「変人」扱いする家族の物語である。

辰男の「独学」行為を評価し直すためにここで補助線としたのが、イヴァン・イリッチの『脱学校の社会』である。イリッチは、教育や学びといった営みが学校制度によって独占されること（学校による教育の囲い込み）を問題視し、学校制度を含めた、社会全体の「脱学校化」を説いている。辰男の「独学」行為がこの「脱学校化」の実践などと断言するわけではないが、本来ならば学校や教育の価値を伝搬すべき存在である教員が、「独学」という、学校制度への抵抗とも取れる行為に没頭していることは重要だろう。こうした点を踏まえ、この章では、学校制度に抗う〈田舎教師〉という辰男の「変人」性が、当時成熟しつつあった学歴社会のありように対し批評性を内包したのもであったと指摘した。

第九章「失権する教員と「新教育」の転覆」では、谷崎潤一郎「小さな王国」の教員表象と、彼の教育実践のありようについて検討を加えた。「小さな王国」は、従来、作品発表前年に生じたロシア革命や、当時の共産主義の動向と関連付けて読まれることの多かったテキストである。しかしここでは、作中に登場する教員・貝島の教育実践のありようと、同時代の教育パラダイムの関係性に着目し、読み直しをはかった。

例えば、子どもたちにとっての「怖い先生」ではなく「面白いお友達」になろうと試みる貝島の姿は、「児童中心主義」をうたう大正期の新しい教育思想に合致するものとして評価できる。しかしながらそのように新時代の教育パラダイムを受け入れた結果、貝島は教室における権威を失い、凋落してゆく。このようにアイロニカルな構造を持つ「小さな王国」を、ここでは、同時代の自由主義的な教育パラダイムに対する批評的なテキストとして位置づけた。

先の第六章では、教育言説が提示する文学作品の解釈の特異性に触れたが、**第十章「「有島事件」と教員読者」**では、教育雑誌や教育言説が、近代文学の「作家像」をどのように描き出していたのか、という問題について考えた。

ケーススタディとして目を向けたのは、大正期の国語教科書に多くの作品が掲載されていた有島武郎である。教材化された有島テキストは、語り手である「私」と、作者・有島を直結する、大正期の人格主義的な読みのパラダイムの中で享受されていたことが、当時の教育者の発言などから明らかになった。それによって生み出されていたのは、簡単にいえば「苦心」し弱

要 旨

者によりそう聖人君子の如き有島武郎イメージだったと言える。

しかしながらこのように美化された有島イメージは、大正12年の情死事件、いわゆる「有島事件」によって大きく揺らぎ、反転することとなる。この事件によって、教科書に掲載されていた有島作品も、悉く削除されてゆくのだが、ここで注目したのは、現場の国語教員たちがこの事件をどのように見ていたのかということである。実際に当時の教育雑誌を見ると、有島をいわば「生きた教材」として批判的に乗り越えようとする教員たちの発言と記述を確認することができた。

従来、「有島事件」は、同じ年の9月におきた関東大震災によって忘れられ、一時的かつスキャンダラスな消費に終わった事件として説明されてきた。しかしこの章での作業によって、有島テキストや「有島事件」の一時的な消費者にはなり切れない教員読者のありようが浮き彫りになったと言える。

以上のような分析から、近代日本の学校教員を取り巻くイメージを維持・強化し、時に攪乱するようなメディアと文学の機能が浮き彫りになった。終章でも指摘したように、こうした成果は教育の「ブラック化」が問題視されつつある現代の教育問題とも接続が可能だろう。このような意味においても、本研究は一定の社会的インパクトを有するものであると言える。